

---

## 四の姫と薬草使い～恋敵はヒゲのおじさん!?

十海 with いーぐる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四の姫と薬草使い〜恋敵はヒゲのおじさん！？

### 【Nコード】

N3799Z

### 【作者名】

十海 with いーぐる

### 【あらすじ】

ツンデレ姫が恋をした。お相手はド天然わんこ騎士。立ちふさが  
る恋敵は何と、無自覚キュートなおじさん！「負けるもんですか。  
絶対、『私の騎士』を取り戻す！真つ当な道に引き戻してあげる  
んだから！」翼ある猫は梁の上、ひっそりもっふりうずくまる。  
もわもわとしっぱをふくらませて……嵐の予感がした。さっ  
くり読めてほつくりあったかい、ちょいずれ系ユーモアファンタジ  
ー第二弾。

【1】彼氏だなんてウソでしょ！？

ド・モレッティ伯爵の居城は、西の辺境を統べる西都ヴェスタポートにある。

彼が団長を務める西道守護騎士団の本部もそこにあるからだ。

普段は家族ともども西都の城に住んでいるが、月に何度かはアインヘイルダールの駐屯地へ赴き、皆にほど近い場所に建てられた別館に滞在する。

団長なのだから当然の務め。その間は奥方とも、四人の可愛い可愛い可愛い（以下略）娘たちとも離れて過ごさなければいけない。

幸い、ここ1、2年は長女の一の姫ことマイラが女領主としての才覚をめきめきと表してきたこともあり、彼女に城をまかせて奥方を伴うことも増えてきた。

しかしながら、やっぱり娘と離れるのは父親として寂しいらしい。

だがこの春、ド・モレッティ伯爵の寂しい単身赴任に若干の変化が出てきた。

正確には、春にアインヘイルダールで行われた馬上槍試合を境目に。

何と。引つ込み思案で滅多に城から出たがらないはずの末娘が。

四の姫ことニコラが、こんな事を言い出したのだ！

「お父様！ 次のアインヘイルダールへの出向、私も一緒に行きたい？」

「もちろんだとも！」

四の姫ニコラは、小さな頃体が弱かった。そこで一時期アインヘイルダールの別館で育てられていた。

何となればこの町には、世界を支える大いなる力の流れ、すなわち『力線』が通っている。

その影響で土地の力そのものが活性化し、土地に根付く草木も、生き物も、みなすくすく丈夫に育つ。

力線の恩恵を受けてニコラは健やかに育ち、丈夫で元気な娘に成長したのだった。

ちよつとばかり元気になりすぎた感が無きにしもあらず。だが、そこは親のひいき目。

揺り籠の中でかぼそい声で泣いていた青白い赤ん坊が、今や薔薇色の頬で駆け回っているのだ。

笑顔にもなろうと言つもんである。

ド・モレッティ伯としては、幼少時代を過ごした懐かしい町で過ごしたいのだろうな、ぐらいにしか認識していなかったのだが。

四の姫も御年14才。男親の予想の斜め上をぶつ飛ぶお年ごろ。アインヘイルダールを訪れる目的は、きつちり別にあつた。

毎日のようにさりげなくおしゃれをして……さらさらした金色の髪の毛には入念にブラシをかけ、顔も手も丁寧に洗い、マイラ姉様からもらった薔薇水をすり込んで入念にマツサージ。

口紅はまだ早いから使わせてもらえないのがちよつと残念。お気に入りの水色のリボンを結んで、いつもよりほんの少し裾を長く、ウエストを絞って、袖を膨らませたドレスを着る。

そして、足取りも軽やかに向かう先は西道騎士団の砦なのだった。それほど時間はかからない。ド・モレッティ伯の館からは地続きだし、ほとんど離れていないから、お供を連れて行く必要もない。お父様に会いに行きます、と言えば、婆やも爺やもあつさり行か

せてくれる。

しかしながら、ニコラ姫が向かうのは団長の執務室ではなく……  
若い騎士たちのたむろする屯所なのだった。

さりげなく通りかかったふりをして尋ねる。

「デーンドルフはどこ？」

声をかけた相手は、訓練所を卒業して先月配属されてきたばかりの若い騎士たち。年も近いから何となく話しやすかったのだ。

『あ、女の子！ 女の子だ！』

『だれ？』

『団長のお嬢さんだよ。伯爵家のお姫様だよ！』

ざわめく少年たちの中から一人、銀髪の騎士がすうつと進み出て、  
答えてくれた。

「ダイン先輩なら、厩舎ですよ」

「ありがとう！」

ドレスの裾を翻して駆けて行く。

屯所のすぐ裏手、中庭に面した広い厩舎には、騎士たちを乗せる馬がずらりと並んでいる。どの馬も筋骨隆々とたくましく、鼻面からして幅広い。筋肉の盛り上がった四本の脚は、丸太みたいだ。

ぶるるる。

ぶひんっ！

巨大な生き物の声と、におい、体から発する熱のこもった通路を

歩いて行く。

彼がいるのは……正確には、彼の馬が居るのは、一番奥だ。

デイトヘルム・ディーンドルフは上着を脱いで腕まくりをして、藁まみれになって馬の世話していた。

弓を引くのは兵士の仕事、武器の手入れと馬の世話は従者の仕事……なんぞとのんきな事を言ってられるのは王都あたりの恵まれた騎士さまなればこそ。

西の辺境では、自給自足が基本。全て自分でやらなきゃいけない。どいなか自らピッチフォークを振るって馬房の寝わらを交換し、飼い葉をあたえ、水を飲ませるのだ。

「ディーンドルフ！」

「やあ、レディ・ニコラ！」

くつたくのない笑顔で出迎えられる。どっきん、どっきんと炒った豆みたいに飛び跳ねる心臓を押さえて、ついつと顎をそらせた。

「あなた、隊の子たちにダインって呼ばれてるのね」

「あー、ほら、長い名前は言いづらいから」

うん、知ってる。名乗る時もいつもそうだって。

『デイトヘルム・ディーンドルフ。通り名はダインだ。好きなように呼べ』

「何だったら、君も呼んでいいぞ。ダインって」  
「いいでしょう」

鷹揚にうなづく。

だけと言えなかった。

「わたしの事もニコラって呼んで」とは。  
レディって呼ばれるのが嬉しいからってこともある。だけどそれ以上に、恥ずかしかった。照れ臭かった。

ぶふーっ！

なまあつたかい風が顔をなで、髪を舞い上がらせる。

「ひゃっ」

（ひゃって何！ もっと可愛い声出せないの？ ああもう私のバカっ！）

「くら、黒！」

ぬうつと伸ばされていた馬の鼻面を、ダインの手が軽く叩く。

「こいつ、ご婦人にはやたらと愛想が良くってさ」

「よろしいんじゃないの？ 騎士の馬として相応しい礼儀じゃなくて？」

（しまったあ！）

ニコラはこっそり、首をすくめた。

（何、えらそうなこと言ってるの私ってばかわいげないーっ！ ぜったい、生意気って思われた。わぁん、どうしようっ、どうしようっ、どうしようっ！）

「ははっ、それもそうだな！」

笑ってる！

「これから、ひとつ走りする所なんだ。よろしければ、一緒に……」

「行く、行く、乗りたい！」

手際よくダインが馬具をつけるのを見守った。

「……よし、準備完了」

手綱をとって厩舎から出ると、ダインは身軽にまたがった。

（え、え、何、一人でさっさと行っちゃうつもり？ 乗せてくれなの？ 自力でよじ登れってこと？）

小山のような黒馬を見上げて途方に暮れていると……目の前に、手が伸びてきた。

「おいで、レディ・ニコラ」

夢見るような気持ちでつかまった。差し伸べられた、逞しい手にふわっと体が宙に浮き、あれっと思っただけもう鞍に座らされていた。

「うわっ、た、高い！」

馬に乗るのは始めてじゃない。だけど自分が今まで乗ってきた華奢な馬とは、全然違っていた。

まるつきり別の生き物だった。まるで船だ。生きた岩だ！

びっくりしたけれど、怖くはない。後ろから抱きすくめるように



して、ダインがしっかり支えていてくれるから。

「しっかりたてがみに掴まって」

耳の後ろで声がする。あの時と同じだ。  
馬上槍試合で、勝利の行進をした時と。

「こ、こう？」

「そうそう、上手い上手い。それじゃ、行くぞ！」

丸太のような脚が地を蹴り、走り出す。  
どおん、どおんと蹄が大地を穿つ音が轟く。それなのに黒い馬は軽々と走り、まるで重さを感じさせない。空を飛ぶついでに、時々地面を蹄で蹴っているようだ。

「怖いかな？」

「ううん、いい気持ち！」

「そうか、レディは乗馬の素質あるな！」

砦の周りを一周する間、ニコラはふわふわと雲の上を走っているような心地だった。

中庭に戻ってきて、優しく抱き下ろされた時も、ふわんふわん。強い風に吹き流されて髪の毛も、ドレスもくしゃくしゃだったけど気にしない。大きくてあったかい、がっしりした手が撫でてくれたから。整えてくれたから。

「櫛、ないから、ここまでしかできないけど」  
「いいの。ありがとう」

うつとりしたまま館に戻ってふと気付く。そう言えばお父様の部

屋に行くの、忘れてたって。

（ま、いいか）

こんな調子でアインヘイルダールに滞在している二週間の間、四の姫は一日も欠かさず騎士団の砦に通い続けた。

ひたすら『私の騎士』に会う為に。何か妙だなとは思ったものの、モレッティ伯爵も深くは追求しなかった。

娘と過ごす時間が増えるのは、彼女にとっても嬉しかったからだ。たとえ、他の目的があるとしても。

入り浸ると言っても騎士団の砦の中だ。周りにいるのは全て自分の部下。さしたる危険もなからうと……。

次の出向にも、ニコラは進んで父親に同行した。

ひと月ぶりにアインヘイルダールにやって来て、さっそく屯所に行ってみたら、ダインがいなかった。

（また黒の世話してるのね？）

厩舎をのぞいてみたら、何としたことが。黒馬の姿まで消えている！

大慌てで屯所に引き返し、息せききって尋ねた。

「ディーンドルフはどこ？」

居合わせた騎士たちは顔を見合わせ、微妙な表情で答えた。

「あーいや、その、ちょっと外出を」

「今週はあいつ、非番ですからね……」

「そう。どこに行ったかご存知？」

「え、あ……と、友だちのどこ、かな？」

「そう、友だち！ 友だちの家ですよ！」

そろいもそろって奥歯に物の挟まったような言い方で、決して目を合わせようとしない。

つぴーんつと少女の頭の中で鋭い光がはじけた。

（おかしい。おかしい。絶対、ただの友だちじゃない！）

「あー」

進み出たのは、銀髪の新米騎士。先輩たちが慌てて身振りやら目配せで止めようとするが、一向に気にする風もなく、さらっときっぱり言い切った。

「ダイン先輩なら、彼氏の家に泊まり込んでますよ」

「何ですってええええ！」

「はい。ここんとこ非番の週は、いつも」

ぐわわわわぁんつと、ニコラの頭の中で鐘が鳴った。

（か、彼氏ってどう言うこと！ 恋人？ 恋人なの？）

私の騎士に、恋人がいた。それだけでもショックなのに、よりによって男が相手だなんてえ！

「……どこなの」

うつむき、ぶるぶる震えながら問いかけた。地の底から轟くような、低い声で。

「はい？」

「ダインが泊まり込んでる家。どこ？」

「薬草店です。北区の裏通りにある」

「そう、ありがとう」

それだけ聞けば、充分だった。

くらくらする頭を抱えて、どうにかその場を立ち去った。途中、壁やら柱やらにごっん、ごっんつとぶつかりつつ。

四の姫が去ってから、屯所には一斉に突っ込みの嵐が吹き荒れた。主に銀髪の新米騎士に向かって。

「シャルダン！　こら、お前、言うに事欠いて何てことをーっ」

「空気読め！」

「だって、周知の事実じゃないですか」

悪びれもせず、シャルダンと呼ばれた騎士は答えた。淡々とした口調で、何でそんなに怒られるのかわからない、とでも言いたげな表情で。

「それに、団長のお嬢さんは聡明な方なんですよ？　下手にごまかすよりは、正直に打ち明けた方がいいんじゃないかなって」

「ああ、確かにお嬢さんは聡明で賢いけどな……それは三の姫だ！」

銀髪の騎士は、ぱちぱちとまばたきして、顎に手を当てて首をか

しげた。

「……おや？」

「今お前が話してたのは、四の姫！」

「やあ、これはすっかりしていました。道理で年の割に幼く見える方だなあと」

「おーまーえーはーっ！」

## 【2】鳥のような、猫のような。

アインヘイルダールの北区。表通りから奥へと入り、かくん、かくんと角を三つばかり曲がった先に一軒の薬草屋があった。

最初の礎が打ち込まれてから優に百年は越していようかと言う古い家は、積み重なる年月とともに建て増しを重ね、間口の割に中は広く、ゆったりした作りになっている。

その一室。薬草屋の現店主にして家の主、フロウライトの寝室では、当の主がベッドの下にもぐりこんでこそと探し物の真っ最中だった。

何となれば、朝食を終えてさてベッドを整えようとしたところ、昨夜被っていたはずの毛布が一枚、こつぜんと消え失せていたのだ。

最近、この家で行方不明になる物が増えていた。靴下、スリッパ、クッション、ハーブの束に上着にシャツ。どれも肌触りのよい、上質なもののばかり。

「つかしいなあ……どこに行った？」

と……その時。

とすつと天井の梁から、黒い影が舞い降りた。  
にじりよじりと忍び寄り、伸び上がり、椅子の背に引っかけたフ  
ロウの上着をぺしつと器用に前足でたたき落とす。

「ん？」

気配を感じた薬草師が振り向くと、金色の瞳とかち合った。

ふわふわした黒と褐色の羽毛に覆われた、異界の生き物。

猫のようにしなやかで、鳥のように翼を広げて自在に飛び回る。

『とりねこ』が床の上、今しも上着をくわえてずりずり引きずっている所だった。

「ちび……」

目が合うとくわえていた上着をぼてっと離し、ちよこんと小首をかしげて、愛らしい声でひとこと。

「ぴゃ？」

「おーよしよし、可愛いなあ」

「ぴゃ、ぴゃ」

のそのそとベッドの下から這い出し、床の上にあぐらをかく。ちびは咽をごろごろ鳴らして愛らしさ全開。ぐいぐいと顔をすり寄せ、ひざに乗ってくる。

「……ちーびー！」

すかさず、むんずつとばかりに首根っこを捕まえた。

「お前か！ お前が犯人かーっ」

「ぴゃーっ」

「毛布どこに持ってた。ああん？」

ぺたーっとならを後ろに伏せてしまった。のぞきこむフロウの視線から目をそらし……何やら戸棚の上を見ている。

「……」

踏み台を持って行って、上がってみると、あった。  
とりねこの、巣。

クツシヨンに、毛布に、見当たらないなと思っていた乾燥ハーブ  
が一束。かたつぽだけになってたスリッパの片割れも。即座に回収  
する。

「ちーびー」

「ぴゃーっ」

しつぽをぶわぶわに膨らませ、逃げようとするのを、素早く襟首  
ひつつかまえてぶら下げる。

「ったく油断も隙もありやしねえ。巣ー作るのは自由だが、勝手に  
人のものを持つてくなー！」

「ぴい」

ちびはしょんぼりとうな垂れた。

不完全ながらも『とりねこ』は人の言葉を理解している。言えば  
ちゃんと通じるはずなのだが、時々わかっててやらかすから始末が  
悪い。

と。

やにわにぴつと耳を起こし、しつぽを立てた。

来たな？ 思っ間もなく開け放したドアから、ひょっこりとダイ  
ンが顔を出す。

「とーちゃん！」

「よう、ちび。今度は何やらかした？」

「ぴい！」

「こまった奴！」



「ぴゃあ」

（あーあ。でれんでれんにゆるんだ顔しやがって、ぜんぜん叱ってないぞ、お前さん……）

「なーフロウ。俺がタベ着てたシャツ知らないか？」

シャツが無いからか、素肌の上にいきなり上着を羽織っていた。黒を基調とした実用本位の詰襟、西道守護騎士団の制服を。

「どこって……脱いだ場所にあるだろ普通」

「うん、見たけどないんだ」

「あー、つてことは……」

「ぴい」

だらーんとぶら下げられたまま、ちびはちらっ、ちらっとベッドの下に視線を走らせている。自白したも同然だ。

「……ベッドの下」

「え、そんなところに？ 何で？」

「いいから。ちびに聞け」

「え」

ダインがごそごそとベッドの潜り込む。ほどなくして。

「あー！」

「あったか」

「……うん」

ちびはぺっと耳を伏せ、素早く梁の上に飛び上がった。半分は翼、

半分は脚の力で。

入れ替わりにのっそりとダインが出てきた。手に変わり果てたシヤツをつかんで。

「あーあ……よくもまあ、しわくちゃにしゃがって、こいつは！」

前足でほっくりほっくりやらかして、ちゅっぱちゅっぱ吸ってたらしい。

「うーわー、羽根と毛が……」

ちびは素知らぬ顔で梁の上につずくまり、じっと金色の目で見下ろしている。

もはや反省の色は欠片もない。

「災難だったなあ」

「洗ってくる」

ため息一つつくと、ダインはシャツを片手に下に降りて行く。フロウも一緒に階段を降り、裏庭に面したドアへと向かう青年の背中をぽんつと叩いた。

「とーちゃんの匂いがするし。洗いざらしでいい感じにくたくたになつてたし。いい巢材だと思ったんだろうよ」

「ったく。しょうがねえなあ」

目尻こそ下がっていたが、口の端はゆるんでほんの少し上がっている。

つまり、根本的には困ってないってことだ。

「そーだな、お前さんの猫だもんな」

したり顔してうなずきつつ、さりげなく毛布と靴下を押し付けた。

「ついでにこれも頼む」

「おう」

騎士さま満面の笑みを浮かべ、いそいそと井戸端に歩いてく。わさわさ揺れるぶつといしつぽが見えそうな勢いだ。

（つくづく素直なワンコだねえ）

かすかに空気が揺れたと思ったら、とんと肩に柔らかな生き物が舞い降りてきた。

「ぴゃ、ぴゃ！」

上機嫌で体をすり寄せてくる。

既にちびの頭からは、フロウに叱られたことも。自分のやさしいあれやこれやの記憶も、まとめてきれいさっぱり抜け落ちているらしい。

それこそ『とり』のように。『ねこ』のように。

「んじゃ、ばちばち店開きと行きますか」

居間を通り抜け、ドアを開けて店に入る。

商品の棚を覆っていた布を外し、カーテンを開け、窓のよろい戸をあげる。既に日は高々と上がっていた。差しこむ陽射しの眩しさに、思わず知らず目を細める。

その間、ちびはフロウの肩に乗ったり、足下をすり抜けたり、はたまた天井の梁に飛び上がったりたい放題自由自在。

最後にドアの鍵を開け、「OPEN」の札を出して準備完了。カウンター奥の気に入りの椅子に陣取り、ほっと一息……つく間もなく、バターンとドアが開いた。

「お？　いらっしやい」

少女が入ってきた。ずかずかと大股でまっすぐに、金色の髪を逆立てて。

（……何だ？）

天井の梁の上からちびがじっと見下ろしている。耳を伏せ、ひっそりしつぽを膨らませて。

嵐の予感がした。

### 【3】姫、参上！

四の姫はずんずん歩く。閱兵式さながらの規則正しい足取りで、ずんずん、ずんずん一直線に、まっしぐら。

水色のリボンをなびかせて、さらりと癖の無い金髪を揺らし、おろし立ての赤い靴を履いた両足を、前へ前へと蹴り出して。

ニコラにとって、アインヘイルダールの街は幼年期を過ごした、慣れ親しんだ場所だ。

北区と言われてすぐにどこにあるかわかったし、迷わず正しい道を選ぶことができた。だが、さすがに表通りを外れるのには勇気が要った。

建物と建物の間を通る細い道は、壁に日光が遮られるせいか、うつすらと暗い。

「その細い路地を、道なりにまっすぐ、道なりに……」

つい先ほど、屋台の女主人から聞いた道順を呪文のように繰り返す。

商売柄、件の薬草店をよく利用してるらしい。『いちばんの近道なのよ』と言っていた。

壁と壁に挟まれたほの暗い道は、見渡す限りまっすぐ伸びている。まっすぐすぎて、どこまで続いているのかわからない。

（この先に、ダインがいる。私の騎士がいる）

（あやしげな薬草師にたぶらかされて、店に入り浸ってる。しかも相手は男！）

こくつと咽を鳴らすと、ニコラは拳を握り……えいやつと踏みだ

した。

ほんの少し手を広げれば、指先が左右の壁に触れてしまいそうなくらい細い道を、前へ。前へ。ずんずん前へ。

（どんな美少年でも美青年でも負けるもんですか！　ダイ、絶対、あなたを取り戻す！　真つ当な道に引き戻してあげるんだから！）

氣勢を上げたその瞬間。唐突に細い道は終わり、ぽこんと飛びだしていた。何の前触れも無く、左右に横切る広い道に　それに　したって表通りに比べれば狭いのだけれど。

『下半分は石造りで、上半分は木でできた古い家だよ。看板が出てから、すぐにわかるし裏には薬草畑があるからね。鼻が教えてくれるよ』

屋台の女主人の言葉を思い出し、すーはー、すーはーと大きく、深く、息を吸う。

「あ」

混じり合う花と草の香りがした。毎日飲むお茶や、家の中に掲げられたリース、料理に使うスパイス、そして怪我に塗ったり、病気の時に飲む薬。そして、今朝使ったばかりの薔薇水の香り。

においを辿り、ほどなく古い木のドアにたどり着く。ぴかぴか光る真鍮の取っ手。軒先に下がる木彫りの看板には、流れるような書体でこう書かれていた。

『薬草・香草・薬のご用承ります』

（まちがいない。ここだわ！）

だんつと脚を踏ん張ると、ニコラ・ド・モレッティは胸を張り、勢い良くドアを開けた。

目に見える場所ほとんど全てに、ガラスの瓶が並んでいた。掌に収まるほどの小さなものから、両腕でやっと抱えられるくらいの大きなもの、その中間を埋めるあらゆるサイズの瓶が。

中味は乾燥した花やつぼみ、粉末や水薬、あるいはオイルに漬けた葉や茎、実、根っこなど。台所のスパイス棚にちよっぴり似ている。だけどずつと数が多かった。

高くそびえた天井に張られた紐からは、乾燥した草の束がぶら下がっている。

そして押し寄せてくる香りの渦は、干され、混ぜられ、練り上げられて。生の草や花よりずっと濃く、強かった。

日なたと牧場まきばと蜂蜜のにおいが溶け込んでいた。

「お？ いらつしゃい」

奥のカウンターに座っていた男が顔を上げ、声をかけてきた。

「……………ごきげんよう」

とっさに挨拶を返しながらも、ニコラは正直、面食らった。

（だれだろう？）

むちつとした体つきは、どこか子犬を思わせる。

ぱつちりした二重の瞼に蜂蜜色の瞳、ふつくらした唇、つやつやした頬はうつすらとヒゲに覆われていて、大人なのか、子供なのかよくわからない。

（まさか、この人がダインの『彼氏』？）

見た所、他に店員の姿も客の姿もない。二人っきりだ。

恋敵（不確定）の前を通り過ぎ、商品の並ぶ棚の前に立った。ガラス瓶に入った草や花を一つ一つにらみながら、隙を見てちら、と振り返る。

思ったより背は低かった。美青年でも、増して美少年でもない。だけど、何故か目が引き寄せられてしまう。じーっと見つめていたくなる。

見ないふりして視線をそらしても、気になって、気になって、しかたない。

（どうして？ やっぱり顔？ 顔なの？）

気配を感じたのか、男がこっちを向いた。あわててさっと視線をそらし、ガラス瓶をにらみつける。

（あ）

とろりと濃い褐色の水薬が満たされた瓶は、まるで鏡のように背後の景色を写していた。こっちの表情も、目線の動きも、全て。

（見られてたーっ！）

瓶に写る男と、目が合った。



合ってしまった。

「何かお探しですかい？ お嬢さん。」  
「わっ！」

その場で飛び上がりそうになった。いや、ひよつとしたら知らないうちに飛び上がってしまったのかもしれない。近くの棚がカタンと揺れたから。

（落ち着くよ、ニコラ！ 元々、この人と対決するために来たんじゃないの！ 逃げてはだめ。逃げてはだめ。私は、騎士の娘だもの！）

意を決してぱつと振り向いた。勢いで金色の髪が舞い上がる。

「……私の騎士がここに来てるはずなんだけど？」  
「騎士？」

男は怪訝そうな顔をしたが、すぐにああ、と小さくうなずいた。

「ダインなら、裏の井戸んとこさね」  
「そんなとこで何を？」

「んー、洗濯。飼ってる猫がやらかしたから、飼い主の責任ってやつでな」

「猫、飼ってたんだ……」  
「ああ。砦だとうるさく騒いで迷惑かけちゃうからな。俺が預かってるけど、飼い主はダインだ」  
「って！」

はっと気付いた。気付いてしまった。

「だ、ダインって、あなた彼のことダインって、なれなれしいーっ！」

「ん？ だってアイツの名前長くて面倒じゃねえか」

男は首を傾げ、ゆるい笑みを浮かべた。ほんの少し眉を寄せ、困ったような表情が混じっている。

「皆そう呼んでるだろ？」

「そうだけどっ」

『あー、ほら、長い名前は言いづらいから』

『何だったら、君も呼んでいいぞ。ダインって』

この人にも言ったんだ。あの調子で。いつもの事だ、誰にでもそう言う人だってわかっていているけれど。

両手を握りしめる。体中に広がる震えを止めようと、必死になつて指に力を込めて……きつと顔を上げ、男をにらみ付けた。

「あなたっ、彼と、その……………」

耳の奥でがん、がんと低い音がする。

変な感じがした。確かに自分はこのに立っているはずなのに、足下がふわふわして、ぐるぐると激しく渦巻く竜巻の真ん中を漂っているような気がした。

（あー、こう言うのって、えーっと、何て言えばいいんだっけ、彼氏？ 恋人？ やだ、そんなこと言ったら認めてるみたいじゃないの、悔しい。もっと別の言い方探さなくちゃ……………）

必死になつて知つてゐる限りの言葉を漁つた揚げ句、出てきたのは。

「あなた、ダインとデキてゐるってほんと？」

「え？」

どこから拾い上げてきたものか、やんごとなきレディにはいささかそぐわぬ、ちよつぱり下世話な言い回しだった。

男はきよとした顔でぱちくり瞬き。目をまんまるにして、肩をすくめた。口の真ん中に力を入れて、にゅつとくちばしみたいに突きだして。

「……………さあ？」

いい年の大人のやつてゐる仕草だ。冷静に考えれば、笑つちゃう（それも苦笑の類い）はずなのだが。

予想に反してこみ上げてくる感情は……

（何つ、何なのこの可愛さはっ！）

まるでもぞもぞ藁の中で動くヒヨコか、草むらにもぐりこむ子犬を見ている時のような、何ともくすぐつたい愛おしさなのだった。

見てるだけで、撫でずにはいられない。さわりたくて指先がむずむず動いてしまうような。

（負けてる？ 負けてる？）

いいえ、まだまだ勝負はこれから！ 氣力を奮い起こすと四の姫ニコラはついつと顎をそらせ、目を細めた。

「わかつたわ、質問を変えます」

知っている限りの堅い言葉を選び、抑揚のない声で問いかけた。

「非番の週に、ダインがここに泊まり込んでいると言っるのは事実ですか？」

「……ああ、それはまあ……確かに、休みになるたびにうちに泊まりに来てるね」

帰ってきた答えの中味とさりげない口ぶりに、仮初めの冷徹はあっさりとは溶け崩れて消えた。

「やっぱりーっ」

生まれたての子鹿のようにぶるぶると震えながら、ニコラは男の顔に手を伸ばし、頬をつついた。

「……なんだよ」

ぷにん、と指がほどよく沈み、次いで押し返される。何と言っか、たいへん触り心地がよい。

「……」

（ま、まさか、こっちも？）

恐る恐る手を下に滑らせ、着崩したシャツの上からさえ、むっちら盛り上がっているのがわかる胸を突いた。

「……だから、なんだよ」

むにゅん。

やっぱり指が押し返される。張りのある肌と皮膚と、肉に。ぺたつと手のひらを当ててみると、もっちり握れるほどの質感があった。

もう片方の手で自分の胸をなでると、つるぺたすといんつと一気に腹まで落ちてしまった。

（何で試したりしたんだろう。わかりきってたことなのに！）

「ず……ずるいーっ！ おっ、おじさんなのに、こんなに可愛いなんてーっ！ こんな、こんなに乳があるなんてーっ」

涙を浮かべると、ニコラは恥も外聞も意地もかなぐりすて、握った拳でぽかぽか叩いた。自分なんかよりよっぽど豊かで、触り心地のよい胸を。

「いやだからお譲ちゃん！ 年ごろの娘さんが乳とかそんなまずいだろー！」

「乳を乳って言ってどこが悪いのよ！ この。この。このーっ」

叩けば叩くほど、ぽよん、ぽにゅんと拳が跳ねる。それがまたさらに悔しさをかき立てる。

「ちょ、なっ！？ 一体なんなんだよっ！？」

「ずるい、ずるいっ」

「あーもう、しょうがねえなあ」

ぽすつと頭の上に手が乗せられ、撫でられた。完敗だった。

いっそ、思いつきり冷徹でナルシストな美青年とか。やたら生意

気な美少年だったら、その未熟さ、器量の狭さを見下し、自分が優位に立つこともできただろうに。

（これじゃ、嫉妬もできないよお……）

やれやれ、どうしたものか。

薬草師フロウはため息をついた。

飛び込んできた金髪の少女は、どうやらダインの知り合いらしい。身なりもいいし、言葉遣いもきちんとしてる。いい所のお嬢さん、それもしっかりした教育を受けてる娘なのだろう。

それがいきなり『私の騎士はどこ？』『ダインとデキてるの？』と来たもんだ。

（まったく、あの無自覚天然タラシにも困ったもんだ……）

えくえく泣きじゃくる少女をなだめる一方で、フロウはある事に気付いた。

「えっ？」

店で扱っているのは、薬草や香草ばかりではない。専門の店に比べればほんのわずかなものではあったが、魔術の触媒や術具も置いてある。

その術具を並べた一角が、さつきから騒がしい。

少女の感情が昂ぶる度に、カタカタとケースの中で揺れている。地震かとも思ったが、他の物はびくともしていない。ただ、揺れているのではない。微妙に活性化しているのだ。どこからか注がれた

魔力によって……。

自分ではない。こう見えても魔術師の端くれだ。無意識に魔力を漏らすような事は滅多に無い。使っていない自覚もある。

ちびでもない。

さっきから天井の梁で息をひそめ、ひたすらうずくまっている。当然、ダインでもない。だとすると、残る可能性はただ一つ。

（まさか、この子が？）

#### 【4】騎士、登場。

「んびゃーっ！」

天井の梁の上で、何かが甲高い声で鳴いた。

見上げると、そこに居たのは黒地に褐色の斑模様、金色の瞳の猫だった。つぴーんとしつぽを立てて、翼を広げ、奥に通じるドアの方を向いている。

「あれが、ダインの猫？」

「うん、名前は『ちび』だ」

「羽根生えてるけど！」

「そう言う生き物なんだ」

答えるフロウの額には、じつとりと冷たい汗がにじんでいた。

あの仕草、あの目つき、何が来たかは予想がつく。つくづく間の悪い奴だ。シャツと毛布と靴下と、こんなに早く洗い終わるとは！

（せめて服は着てろよ、ダイン……）

がちやっとドアが開き、ぬうつと金髪混じりの褐色頭が突き出される。

何てこつたい。裏庭に出る時は着てた筈の上着、脱いじまってる。ダインの上半身を覆っているのは、もはや金髪混じりの褐色の髪と、銀色のロケットのみだ。

「終わったぞー」

のほほんと答えるその右肩に、かろうじて畳んだ上着が担がれて



いるのが見えた。なるほど、洗濯する間、濡れないように脱いだかで、そのまま戻って来た、と。

ばーんと張った胸板も。くつきり割れた腹筋も、何もかもフリーダムに、オープンに。

一目見るなり、少女は拳を握ってうつむいて、ぷるぷる震え出した。

しまった、目を塞いでさしあげるべきだったか。

つてなことを考えている間に、つかつかとダインに歩み寄った。

「やあ、レディ・ニコラ！」

につこり笑ってるよ、あのだ天然が！

「どうして、ここに？ よくこの店がわかったなあ」

次の瞬間。

ふわっと水色のスカートが翻り、赤い靴がどかあっとダインの鳩尾にめり込んだ。

「ふぐおっ」

「さいってえっ！」

たまらず、半裸の騎士は腹を抱えて床にうずくまった。

素早くニコラの足は元通り、行儀良くスカートの中に収まっている。

いい蹴りだ。ただのお嬢様じゃなさそうだ。

に、したってダインくん。ぬけぬけとレディの前に半裸で顔出す

とはなあ。よりによって、このタイミングで。

「……えゝ、弁護なし」

「ひでえ……」

ぱさり、とちびが床に舞い降りて、ダインの膝に前足を乗せる。

「とーちゃん？」

「……ありがとな、ちび」

「とりあえずさっさと服来て来い馬鹿」

「へーい」

よれよれと立ち上がると、ダインはちびを肩に乗せ、すごすごと奥へと引ッ込んで行った。

一方でニコラ嬢は耳まで真っ赤にして、ぶるぶる震えていらっしやる。

そりゃーまーそうだよなあ。いきなり男の半裸とか見せつけられちや、なあ。

「……蹴っちゃった……ダイン、蹴っちゃった……」

「あ？」

そっちか。

「まあ良いんじゃない？別に」

「ちよっと、すつきりした」

「そりゃ良かった」

カウンターのコンロで湯を沸かし、ティーポットに茶葉を入れる。

薄くかちつと焼かれた白いカップを選んでこぼこぼと注いだ。

「どうぞ?」

「……何、これ」

「アップルティー。落ち着くぞ」

「いただくわ」

少女はカウンター前のスツールに腰を降ろした。見事だ。無造作にすんとつと腰を降ろしているようで、その実スカートの裾も乱れず、動きの中に気品がある。

両手でカップを持って、こくつと一口含み、目を閉じてしみじみと、あつたまつたりンゴと茶葉の香りを味わってる。カモミールティーにしようかとも思ったが、この年ごろの子には、果実を使ったお茶の方がいいだろう。

それと、甘いお菓子も忘れずに。

木鉢に盛った丸いクッキーを差し出してみた。混ぜ込んだスパイスの色で赤みがかかった褐色が強くなっている。

つんとした爽かな香りは、リンゴの香りと酸味と仲良く溶け合い、混じり合い、互いの味を引き立てる。相性がいいのだ。

「シナモンクッキーもどうぞ」

「ありがと……」

小さな丸いクッキーをぽしつとかじるなり、ニコラは目を輝かせた。

「おいしい! これあなたが作ったの?」

「ん？ ああ。昨日は暇だったからな。」

四の姫はしみじみと手の中のクッキーを見つめた。

スパイスを混ぜ込んだクッキーをきれいに焼くのは、難しい。ちよつとでもオーブンの火加減を間違えたら最後、あつと言つ間に焦げてしまう。かと言つて焼きが甘いと香りが引き立たない。

生地は均一に練られ、絶妙の焼き加減だ。しかも厚みも形もきれいに揃つてゐる。

（可愛くて、胸もあつて、お菓子作りも上手だななんてーっ！ おじさんなのにつ。おじさんなのにつ！）

クッキーをつまんだまま、ぷるぷる肩を震わせる。

（私には無理だ……かなわないっ）

「うえ？ ど、どうした？ 何か、妙なもん混じつてたか？」

「……ずるい」

涙目でじとーつとにらみ付ける。

「は？ な、なんだよ急に！？」

「うーっ」

（くやしい、くやしい、くやしいっ）

ぱりぱりと猛烈な勢いでシナモンクッキーをかじり、アップルテ

イーで流し込む。

リンゴの香りのお茶は、ちょっぴりすっぱくて。砂糖も蜂蜜もはいていないのに、ほんのり甘かった。

「……で、えっと……ダインに会いに来ただけ、で、いいんだよね？」

（んな訳ないでしょ！）

口の周りにクッキーの粉をつけたまま、きつとにらんだ。

「ダインを取り戻しに来たのよ！」

だけど。

さつき、ちらつと見たダインの姿は、のびのびとして。騎士団の兵舎にいる時よりずっと、幸せそうだった。

ここにいるのが、どれほど楽しいのか。くつろぐのか。伝わってきた。

（ここから、彼を引き離すことは、彼のためになるんだろうか？）

声から力が抜ける。がっくりと肩が下がる。

「取り戻すって……何とも物騒な言い方だねおい」

「……そのつもり……だったわ」

「いや、用事があるなら普通に連れてってくれていいが」

「ちがうの。そうじゃないのっ！」

用事なんかない。約束なんかしていない。これはただの、私のわがまま。彼を訪ねていったときはいつも、待っていてくれるって勝

手に信じてた。思い込んでいた。

それが叶えられなくて、怒って、慌てて押しかけてきた。

全て私の暴走。

最低。

「ダインは、ダインは『私の騎士』だからっ！　それが、それが男と恋仲になったとか聞いてっ」

ぼろつと涙が零れる。銀髪 of 騎士から告げられた瞬間、胸の外側に刺さったトゲが……今、やっと心臓に届いたみたい。

堅い殻を打ち破り、柔らかな滴があふれ出す。後から後からぼろぼろと。

「休みのたびに泊まり込んでるって……」

「あゝ……なるほどなあ……………」

差し出されたハンカチは、きれいに洗われ、やわらかく、お日さまとラベンダーのにおいがした。

素直に顔を埋めて涙を拭いた。ついでにこっそり、鼻水も。

「まあ、懷かれては居るが、な」

「いつから？」

「うーん、四ヶ月ほど前か。北の峡谷に、妖鬼の群が出た時があったろ」

「……………うん、知ってる」

「あの時の討伐戦に、奴も参加してたんだよな。で、引き上げてくる時に、会ったんだ」

この人は、私より先にダインに会ってたんだ。  
私と会った時、ダインの心には既にもう、この人が居たんだ。だ

から、あんな風に笑えたの？

何の見返りも求めずに。何の欲も抱かずに。ただ私の前に跪き、名誉のために戦った。

「どうやって、知り合ったの」

「あいつが怪我してたから、手当てした……………まあ、そんなところだ」

バカみたい。

最初っから、かなう筈なんかなかったんだ…………。

顔を拭ってる間に、二杯目のアップルティーが注がれていた。涙を流したせいかな、のどが乾いていた。

こくこくと一気に飲み干した。

「は……………」

リンゴの香りが鼻から咽を吹き抜ける。ひりひり染みた塩辛い痛みが、ほんの少しやわらいだ。

「なあ、お嬢さん」

「ニコラよ。ニコラ・ド・モレッティ」

「そーか。俺は、フロウだ。それで、ニコラ」

「なあに？」

「一人で来たのか？ 此処って結構治安良くないキワキワなんだが」「きわきわ？」

「うん。あと路地の1、2本も曲がれば、スラム街さね」

ざわわあつと背筋が泡立つ。

細い道から店の前を横切る道に飛びだした時。建物の影になった部分や、道と道の交わる角に、妙に目つきの鋭い男たちがたむろし

ていた、ような気がする。

あの時はひたすら店しか見えていなかったけれど……今思つと、  
彼らは確かにこっちを見ていた。

「ちょっと怖かったけど。根性で来た！」

「根性つて……またえらいお嬢ちゃんだこと」

だって、ダインの事で頭がいっぱいで、他のことなんか考える余  
裕なかったんだもの！



## 【5】師匠と呼ばせて！

私の騎士を取り戻す。ここに来るまでの間、ニコラ・ド・モレッティの頭にはそれしかなかった。

乙女の一念は燃え盛る炎となって小さな体の内側にみなぎり、青い瞳からあふれ出し、裏町にたむろするゴロツキや不良少年など、寄せ付けもしなかったのだ。

しかし。

「ごうごうと燃え盛っていた炎は、今やしゅうつと鎮火してしまっ  
た。」

「で、帰りはどうすんだい？」

「考えてなかったーっ！ ど、ど、どうしよう」

さーっとニコラの顔から血の気が引いた。その途端、術具を収めたケースが、またカタカタと細かく振動を始めた。

「まあ、ダインに送ってもらえば心配はねえな……って、ん？」

フロウの目がスウ、とわずかに細められる。間違いない。先刻の予感は今やはつきりとした確信に変わっていた。

この子の感情に、術具が反応しているのだ。

「ダインに、送ってもらうつ？」

ぽつとニコラの頬が赤くなる。その瞬間、またガッタン！ と派手にケースの中で術具が跳ね上がり、ガラスの上蓋にぶつかった。

指輪やメダルと言った比較的軽い物が、まるでフライパンで炒った豆のように跳ねている。

「……なあお嬢ちゃんって、魔術学院の生徒さんか？」

「え？」

きょっととした顔でニコラが首を横に振った。

「ううん、魔術なんて習ったことも使ったこともないわ」

「……ってことは、感情で漏れた魔力でこれか……」

フロウは秘かに舌を巻いた。

無意識にあふれ出す魔力でさえ、これほどの反応を引き起こすなんて。この子が本気で術を使ったら、どれほどの威力を発揮するだろう？

「え、何？ 魔力？」

当のご本人は首を傾げていらっしやるが。

「ん……ちょっと待ってろ」

術具の棚に歩み寄り、蓋に下ろしてあった錠を開けた。途端に中味がカタカタぴょいんと飛び出して来た。

「おっと」

床に転がったのを拾い上げていると、ニコラが側に寄ってきた。

「何？ これ……きれいー」

やはり年ごろの女の子だ。この手のきらきらしたアクセサリーは気になるらしい。目を輝かせている。

「梱包魔法（Packed magic）つつてな……まあ、出来合いの呪文一つを、装飾品に封じた奴だ」

「パックド・マジ……これが？ 実物は始めて見た！」

「まあ、一つあたりの値段が半端ないし、な。街中じゃああまり使う機会もなかるうし」

元通りにケースの中に並べ直す、手の動きを少女の青い瞳が追いかけてくる。

「此処にあるのは市販品ばかりで、いまいち自衛には向かねえから……ああ、これがいい」

透き通った水色の石のはめ込まれた指輪を手にとった。キーとなる石はアクアマリン、地金は銀。流れる波と水を象った意匠が施されている。

「あれ……？ 何だか、それ……」

ニコラが手をかざしてきた。

（お）

白いほっそりした指と、水色の石をはめ込んだ指輪の間に小さな流れができていた。

無論、普通の人間には見えやしない。魔術師が自らの意識をコントロールし、集中し、狙いを定めて始めて感知できる流れだ。

「懐かしい感じがする。見るのはじめてなのに。何で？」

「ああ。多分、お嬢ちゃんと相性がいいんだろうな」

この指輪を作ったのは、水の力を持つ魔術師だ。作り手の力は自ずと作り上げた物にも宿る。おそらく、この少女は水の力を秘めているのだろう。

「これは、いわゆる魔術の『発動体』って奴だ」

「魔術師の使う、杖と同じ？」

「そう、あれと同じだ」

「魔力に方向性を与えて、呪文を投射する手助けをしてくれる道具のことよね。無くても使えない訳じゃないけど、無駄な消費が増えるし、失敗する可能性も高くなる」

おやおや、大したものだ。魔術の仕組みをちゃんと理解しているじゃないか！

才能はあるけど、知識がからつきしな誰かさんとはえらい違いだ。

「わかってるなら話が早い。いいか、ニコラ。今からお前さんに魔法を一つ教えてやる」

「え、え、うそ、ほんとっ？ 魔法教えてくれるのっ？ いいの、ほんとにいいのーっ？」

ほっぺたが真っ赤だ。ここに来てからは概ね赤かったが、今度のはちよつと質が違っている。目の輝きはさらに増し、はふー、はふー、はふーと息まで荒くなってきた。

「……………簡単に身を守れるのを一つだけ、な……………」

こつくこつくと派手にうなずいた。金色の髪が広がり揺れて、まるで翼のようだ。

「え、あれ？ ってことは……あなた、魔法使いだったの！？」

「ん？ あゝ……そだな、一応。いいか、それじゃ見本見せるから」

右手を掲げて、軽く指を曲げた。手首にはめた木の腕輪を介して意識を集中する。

トネリコの木から削りだした腕輪は、使い込まれ、磨き抜かれ、品の良い銚色に染まっている。つやつやした表面には、花を模した印と魔導語が刻まれていた。

『内なる力よ 流れる力よ 集えこの手に……』

呪文の詠唱とともに、腕輪に刻まれた魔導語と印にそって淡い光が走る。

空気が震え、手のひらに青白い光りが集まって行く。ぱし、ぱち、と小さな音を立てて。

『energy-ball!』

言葉とともに練り上げた魔力の玉を空中に放つ。

あたかも鞠のように跳ね上がった青白い球体は、ぱあっといくつもの火花になって飛び散った。

ぱし、ぱし、ぴりり。

金属の部分に軽く青いスパークが走った。

「す……」

「今やったのは略式だ。本当はもうちょい威力のある呪文なんだが、それだと護身用を越えちゃうからな」

「えーと、えーっと……内なる力よ 流れる力よ 集えこの手に」  
「……………」

今唱えたのは、パクト・マギのために作られた、日常語で構成された呪文だ。

魔術師の使う『魔導語』や、主に聖職者の使う『祈念語』と違って、ごく普通に会話で使われる言葉で唱えることができる。  
だからって。

「一発かよ」

「魔法理論の基礎は姉さまから教わったもの。後は、法則に基づいた言葉の組み合わせでしょ？」

「なるほど、下地はあるのか。なら良いや」

同じ騎士の家柄（あの見事な足さばきや教養の高さ、りんとした気性と行動力から察するに）でも、ダインの家と違って魔術に理解があるらしい。

おそらく王都ではなく、この西の辺境に領土を構えた家なのだろう。

古くから西の辺境では、魔術師と騎士が力を合わせて荒れ地を切り開き、蛮族や魔物の侵入から開拓者たちを守ってきたのだ。

「まあ、護身用だがあんまり人に向けて使つなよ？ 30回に1回は人を殺せるかもしれねえんだから」

「威嚇ね！」

「そう、威嚇だ。どれ、ちょっとやってみろ」

水色の指輪を渡すと、ニコラは頬を染めながらそろっと薬指にはめた。指輪の帯びる力と少女の力が溶け合い、結びつく。

やはり相性は抜群だった。

すうつと息を吸い込むと、ニコラは澄んだ声で唱え始めた。

『内なる力よ 流れる力よ 集えこの手に……』

間の悪いことってのは重なるもので。ちょうどその瞬間、ドアが開いてダインが戻ってきた。

今度はきちんとシャツを着ている。

だがあいにくと、彼の入ってきたドアはニコラの真正面だったのだ。やばいな、と思ったがまあ、所詮威嚇用の軽量版だ。ちよつくらしびれはするが大したことはないなまい。

なんてのんきに構えていたら。

『energy-ball!』

『energy-ball!』

「えっ」

おい。今、呪文唱える声が二つ聞こえたぞ。もう一個は、やけにぴやあぴやあした声で……。

慌てて見上げると、ちょうどニコラの真上にあたる梁の上で、翼を広げる黒褐色の斑の生き物が約一匹。金色の瞳を爛々と輝かせていた。

「ちびっ?」

やばい。あいつ、共鳴してる!

「おわあっ!」

ばりばりーっと強烈な火花が飛び散り、部屋の中の金属にぱりつと青白いスパークが走る。

ちびは『使い魔』だ。感情や思念、願いと言った人間の『心の動き』に共鳴し、増幅する習性がある。当然、その中には魔術も含まれる。

意識してやってる訳じゃない。動くものがあれば追いかける。それと同じだ。強い動きがあれば共鳴する。正に今みたいに。

きつちり二倍に増幅された炸裂雷球（energy-ball）の呪文を食らい、ダインはぱたと床にひっくり返った。

「おーい、ダインー。生きてるかー」

「……しびれた」

球体の当たった場所の服が破け、下からのぞく皮膚が赤くなっている。髪の毛の先つちよがくりんくりんに縮れてかすかに焼け焦げたにおいがするものの、命に別状はないらしい。

「ほんと、丈夫な男だねえ」

「俺が着替えてる間に……一体、何が……」

「うん、まあ話せば長くなる」

涼しい顔で治癒呪文を唱えるフロウの横で、ニコラがぼつりとつぶやいた。

「あ、なんかだいぶすつきりした」



最初の一撃こそ『不運な事故』を招いたものの。

フロウの指導のもと、店の中で練習を繰り返すほどに精度は上がって行き……。

西の空に日が傾く頃には四の姫は、自在に炸裂雷球の呪文を使いこなすまでになっていた。

「よし、上等だ。後は実践ある飲み、だな。筋がいいな、ニコラ！」

「ありがと、師匠！」

「し、師匠？ 俺が？」

面食らって目を見開くフロウに、ニコラは手を後ろで組んで首を傾げて答える。

「そうよ？ だって魔法教えてくれたでしょ？」

「あー……なるほど、ね……確かにそーだ」

フロウはほんのり頬を染め、人さし指でくしくしと己の顎の下をかいた。照れ臭かったらしい。

「あー、そうだ、ダイン。そろそろ暗くなるし、ニコラを家まで送ってやんな」

「ああ、元よりそのつもりだ。だけどその前に」

のしつと背後からダインがひつついて、肩に顎を乗せてきた。

「まだちょつと痺れてるんですが、『師匠』？」

すかさずフロウの手が、ぺちつと額を張り倒す。

「おらよっ」

続いて呟かれた言葉は、ニコラにとっては馴染みの薄い言葉だったが、呪文なんだと言うことは分かった。ダインの皮膚にわずかに残っていた赤みが失せ、腫れが引いて行く。

（すごい……。あれを使いこなすには、もっと勉強しなきゃいけないんだ）

「ってえなあ」

叩かれたダインは首をすくめたものの、嬉しそうだ。目尻が完全に下がって、口角が上がってる。あまつさえゆるく開いた唇の間から、白い歯までのぞかせて……。

かちり、とニコラの中でフロウの位置づけが切り替わった。

（わかった。彼氏じゃなくて、飼い主だ！）

「レディ、こちらへ……」

『私の騎士』が手を差し伸べている。以前と変わらぬ、うやうやささと優しさを瞳の中に秘めて。

「ニコラと呼びなさい」

「へ？」

この瞬間、四の姫は悟ったのだった。

（犬と飼い主に焼きもちやいてもしょうがないわ！）

きっぱりと言いつ切るニコラに、フロウが声をかけた。

「まあ、あれだ……頑張ってくれな」

「うん、がんばる。それじゃまたね、師匠！」

満面の笑みで答える姫を、薬草師は目を細めて見送るのだった。  
まるで光を見上げるように眩しげに、蜂蜜色の瞳を細めて……。

【6】いつかは。されど今は。

四の姫は騎士に連れられ、お屋敷へと帰って行った。

夕闇迫る町の中、満面の笑みで意気揚々と、黒毛の軍馬の背に揺られ。

「やれやれ、急に静かになっちまったなあ」

「ぴゃあ」

しーんと静まり返った店の中でフロウはふうつとため息をついた。そもそも、さっきまでが騒がしかったんだ。これが普通。いつもの生活が戻ってきた、ただそれだけの事なのに。当たり前のはずの静けさが、妙に、染みる。

「ぴ……」

ちびがくしくしと顔をすり寄せてくる。

こいつを置いていったってことは、ダインの奴、今夜は兵舎泊まりになるかも知れない。

西道守護騎士団は、王都の騎士に比べれば魔術師への偏見はずつと、薄い。

だが、砦の騎士自らがとおっぴらに使い魔を連れているのは、さすがにちよつと問題があるらしい。

ダインが砦に務めている間、ちびは店に残されるのが常だった。もともと自分が言いだしたことだ。『砦に詰めてる間、預かってやってもいんだぜ』と。

（いや、いや、ちよつと待て、落ち着けフロウ。そもそも、あっちがあいつの本来の住み処だろうが！）

どうにもいけない。それもこれもダインの奴が店に来るたびに『ただ今!』なんて抜かすからだ。

自然とこつちも『お帰り』とか答えちまう。そう、『らっしゃい』じゃなくて『お帰り』と。

(ただ今、か……)

「ふろう?」

ちびが膝の上で伸び上がり、ぷに、と前足で口元に触れてきた。柔らかな肉球がくすぐったい。触れられた場所から顔がほころび、笑みが浮かぶ。

「ああ、心配すんな、ちび。何でもない。何でもないから、な」

お返しとばかりに耳の後ろをかいてやる。ちびは目を細めてごろごろとのどを鳴らした。

「なあ、ちび公。あいつら、なかなかお似合いの二人だとは思わないか」

「にー?」

「そう、ニコラだ」

明朗快活、豪放磊落、公明正大。光を浴びて常にまっすぐに突き進むあの素直な騎士さまにも、影がある。

表面上は人懐っこいが、ダインは滅多に他人に心を許さない。期待もしない。ただ、尽くすだけだ。

理由はいろいろあるが、煎じて詰めれば要するに……。

父親の正妻に、あの手この手で散々苛め抜かれて来た奴が（ダイ  
ン本人は否定するだろうが）、大人になったから、騎士だからって  
理由だけで、簡単に人を許せるだろうか。信用するだろうか？　っ  
てことだ。

あいつが誰かの役に立とうとムキになるのは。筋金入りのお人よ  
しになったのは、利用されるより先に、自分から動いてきた結果に  
過ぎない。

そんな中で、初対面にもかかわらず、ちびはニコラと共鳴を起こ  
した。つまり、ダインがそれだけあの娘に心を許してるってことだ。

「ちいっとばかり跳ねっ返りで若干、若すぎないでもないがな。同  
じ騎士の家柄だ。俺よかよっぽどつり合ってる」

「にー」

「魔術の才能もある。あの娘なら、お前さんのことも可愛がつてく  
れるだろうし……」

ニコラなら、ダインの『目』を恐れたりしない。瞬時に見抜くは  
ずだ。

呪いなんかじゃない。れっきとした魔術の才能なんだって。

（あのお嬢さんなら、きつとお前を幸せにしてくれる……）

いつしか太陽はそびえ立つ町並みの向こうへと姿を消し、薬草店  
の中は青みを帯びた影に塗りつぶされていた。

「おっと……」

ランタンに火を入れた。オレンジ色の明かりがぼわっと部屋を照  
らし、その一方で濃い藍色の影を落とす。何だか急に肌寒くなって

きた。

「飯にするか」

「ぴい！」

燭台に灯したロウソクを片手に、厨房へと引っ込んだ。

黙々とジャガイモの皮をむき、タマネギとニンジン进行刻み、キャベツを切った。

スパイスと肉を合わせて炒め、まとめて大鍋に放り込む。水を注いで、束ねた香草を浸し、ぐつぐつ煮込む。ひたすら煮込む。

こう言う時は料理が一番だ。ちよつとぐらい落ち込んでも、でき上がる頃には気持ち切り替わってる。

一つの何かを『成し遂げた』達成感と満足感が、まわりつくうすら寒い影を振り払ってくれる。

（ダイン。ダイン。お前はまだ若い。れっきとした貴族の息子で、前途有望な騎士さまだ）

（こんなロクでも中年男なんかとツルんでちゃいけない。いけないんだよ……）

『フロウ！』

所々に金髪の混じった、ゆるく波打つ褐色の髪。始めて出会った時は乾いた血がこびりつき、ぐつしより濡れそぼって見るも惨めな有り様だった。

『フロウ？』

日に透ける若葉にも似た緑の瞳。その左には、魔術師ですら望んでも滅多に得られぬ『才』を秘めている。

生憎と奴の属する階級<sup>せかい</sup>では忌わしい『呪い』と蔑まれちゃいるが、自分には分かる。

あれは、れっきとした力だ、才能だ。うつむくな、胸を張れ。できるものなら自分が欲しいくらいだ！

『フローウ！』

図体がでかいくせに、子供みたいに喜怒哀楽がはつきりしていて、些細な言葉でくると表情が切り替わる。

怒る。拗ねる。しょげ返る。涙を浮かべたり、はっふはっふと鼻息荒くして、しっば振って駆け寄って来て……

（ええい、くそ、何だってあいつの面ばっか浮かんでくるんだか！）

「あ」

……てなことうだうだ考えてたら、うっかり大量にシチューを作っちゃった。

しかも、ニンニク効かせてトマトと肉のがつつり入った、奴好みのを。

「しょーがねえなあ」

かまどの火を落としてとろ火にし、鍋の蓋を閉じて煮込みに入った。

（やれやれ、何てこったい）

今週いっぱい、居座る予定だったからなあ。食い物とか飲み物とか、いろいろ買いすぎちゃった。



中年男一人と猫一匹じゃ、食う量なんざたかが知れてる。さて、どうしたものか。

深々とため息をついたその時だ。ばたんつと勢いよく店のドアが開いた。

「悪いな、今夜はもう店じまいだよ」

むすつとした声でとっさに言い返す。考えてみりゃ酷い話だ。よろい戸はまだ下ろしてないし、店のドアには開店中の札が下がってるんだから。八つ当たりも甚だしい。

とりあえず客の顔だけでも見て置くか、と店に出ようとしたら……。

のっしのっしと重たい足音が近づいてくる。やれやれ、せつかちな客だね、こつちまで押しかけてくるなんて！

よほどせつぱ詰まってるのか。

「はいはい、今うかがいますよつと……わ」

ぬうつとばかりでつかい図体が、目の前に立ちふさがる。

「フロウ！」

「ダインっ？」

「ただ今！」

満面の笑顔で抱きついてきた。ちくしょう、あったかいなあ。ええ、シャクに障るったらありやしねえ。

「何で、お前、ここにっ？」

「ニコラは無事に屋敷に送り届けてきたからな。心配すんな！」

「いや、そうじゃなくて、お前、兵舎に戻ったんじゃないのかつ？」  
「は？ 冗談だろ。今週俺は非番だぞ？」

くんつとにおいをかいでる。

「あ、シチュー作ったのか」

「……おう。食うか」

「食う！食う！」

破顔一笑。

ぶんぶんと高速で揺れるぶつといしつぽの幻が見える。

「んじゃ、まずは店じまいしてからな」

「あれ、もう閉めるのか」

「ん。今日は色々忙しかったからな……」

よろい戸を閉め、札を裏返して『Closed』に切り換える。  
扉を閉めてからしっかりと鍵をかけ、店の明かりを消して奥へと引  
つ込んだ。

「結局、今日の客はニコラだけだったな」

「んー、まあ、こんな日もあるさね……そら、熱いから気をつける  
よ」

「さんきゅー！」

食卓に座り、向かい合わせで飯を食う。ほんの四ヶ月前までは、  
想像すらしていなかった。親子ほども年の離れた若い男と二人、毎  
日のように一緒に飯を食うなんて……しかも自分の家で。

『あなた、ダインとデキてるってほんと？』

『…………さあ？』

何だってあの時、彼女の問いかけをはぐらかしたのか。正直、自分でもよくわからない。

だが、これだけはわかる。

この笑顔も温もりも。一途に向けられるまっすぐな信頼も。俺が……俺なんかが、独り占めしていいはずがないんだ。

いつかは手放さなければいけない。  
そうとわかっていても。

（いや、だからこそ）

嬉しそうにシチューをほお張るダインを見ながら、ひざの上のちびをなでる。

「うまいか」

「うんっ、美味いっ」

「いくらでも食え。まだまだどっさりあるからな……」

今、この瞬間だけは。

（四の姫と薬草使いノ了）

【6】いつかは。されど今は。（後書き）

ご愛読ありがとうございました。  
機会がありましたら、またいずれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3799z/>

---

四の姫と薬草使い～恋敵はヒゲのおじさん!?

2011年12月19日12時48分発行